自分のためだけに関西学院で学んでいるのではありません。自分たちが、地の塩、世の光になるために

昭和シェル石油
株式会社
代表取締役社長
グループCEO
亀岡　剛

1979（S54）年経済学部卒業。同年シェル石油（現昭和シェル石油）株式会社入社。87年英エディンバラ大ビジネススクール卒業。製品貿易部、英蘭ロイヤル・ダッチ・シェル出向、近畿支店長、販売部長、副社長石油事業COOを経て、2015年から現職。

班活動中の亀岡リーダー（上段）

リーダー時代の青島キャンプ集合写真

――中学部から関西学院ですね。

私の親父の弟が、関学のレスリング部で、小学校の夏休みに練習に連れて行ってもらったのです。「うあー、すごい学校やなあ」と思ったのが、最初の関学との出会いです。中学受験をして以来、そのまま関学にずっといたわけで、関学にいることが当たり前みたいで、それは私の人生で、とてもよかったと思っています。

通学は神戸塩屋の奥から1時間45分ぐらいですが、それは大変でした。冬場は耐寒駆け足で8時登校。星の出ているときに家を出て、クラブを終えて帰るとまた星の中ですよ。それでも中学部生活は本当に楽しかったですね。しんどいとも思わなかったです。

――大学時代は中学部のキャンプリーダーをされていました。

中学部の時は陸上をやっていましたが、大学ではずっと千刈や青島でのキャンプリーダーをやっていました。

※ 青島：岡山県牛窓町にある無人島。関西学院中学部および医明学院中学校が毎年夏季キャンプを実施している。

キャンプの目的は、そのキャンプを経験することにより生徒を人間的に成長させる、というところにあるのですが、企業でも社員の皆さんの成長というのは重要であり、この社員教育の面でもキャンプで経験し学んだことがいろいろと役に立っていると思います。

例えば当社の入社式では会場の入り口で私と副社長が握手で「よくきてくれた」とまず歓迎をします。新入社員が挨拶するのは普通ですが、役員も一人ひとり挨拶をします。そのあとのランチ会場で写した私とのツーショット写真を、新入社員研修中に親御さんに「しっかりと育てます」という手紙とともに送ります。親御さんに、いい会社に入ったと思っていただければうれしいですね。こういう感覚を、この関西学院のキャンプで学んだと思います。

――大学を卒業されて、当時100％外資系のシェル石油に入られたわけですが。

当時、キャンプリーダーとともに中学部の陸上部コーチもやっていまして、千刈での合宿の時です。サッカー部も合宿していて、そこに尾崎の八ちゃん（尾崎八郎第3代高中部長兼中学部長）がおられました。

「亀岡君。君、就職かあ。俺の義理の兄がシェル石油にいて、誰か紹介してくれないかと言われてるんだけど、君、受けてみんか」と言われて。

シェル石油は当時、東京の霞が関ビルに本社があって、人事部の人とかお会いした皆さんの雰囲気がよかった。なんか、感覚で合うなあと思っただけで決めてしまいました。祖母は神戸の会社に行って欲しい、と言っていましたが（笑）。

それはやはり、外資系の会社のもつ開放的な雰囲気で、ある意味関学と共通の雰囲気を持っていたかもしれませんね。当時から上司の名前を呼ぶときは役職ではなく「さん」づけでしたし、食堂ではトップの人も皆と一緒に肩を並べてご飯を食べていましたし、本当にフランクな会社でしたよ。だから、私が社長になれたのでしょうね（笑）。

――2月の就職説明会で、スクールモットーの大切さをお話しいただきました。

大学生活の残された一年の時間の使い方や、就職に当たっての心がまえなどの話をしたのですが、その時、「君たちがどのくらい認識をしているかわからないが、この“Mastery for Service”という考え方はすごいことなんですよ」ということを話したのです。

実は、そのレジュメをつくっているときに、当社の担当者が「亀岡さん、よく大学のモットーなんか覚えておられますね」と言うんですよ。その子は自分の出身大学のスクールモットーを知りませんが、当社の関学出身者は皆、言えるのですよね。これはすごいことです。我々は知っていて当たり前だと思っていますが、他の大学の卒業生から見たら普通のことではないのです。

でも、私が言いたいのはここからで、“Mastery for Service”を知っているということだけではなくて、その精神は何かということをどれだけ身につけているかということが大切だ、と言うことです。

ご家族で英エディンバラ大学へ

製品貿易部長当時

本社1Fの「シェルミュージアム」前で

ですから、大学でも単に勉強をすることだけが目的ではなく、勉強、クラブ活動や友人仲間との交流などを通じて、自分は社会に出て貢献できる人間になるんだ、ということを常に意識をしておく必要があると思います。

貢献の仕方は人によって違うと思いますが、少なくとも、自分のためだけに関西学院にいるのではなくて、そこでしっかりと自分を成長させて、社会のために役に立つのだ、ということを目的にすることが非常に大切だと思います。

私には大切にしている軸があり、それは「生かされている」ということ

自分が「生きている」というより、自分は「生かされている」のだということを関西学院でしっかりと学ばせていただきました。「生かされている」から、そこでしっかりと学んだことで社会に出て恩返しをする。

私は経営者としてお客様や特約店様、関連会社の皆さんや、あるいは社員の皆様が一生懸命頑張っていただいているからこそ無事に経営をさせていただいていると考えており、この意識が大切だと思っています。ですから、社員や特約店様や関連会社の方々を愛して、この人たちに生かされていると感じて、一緒になってこの昭和シェル石油グループを成長させていこうという気持ちだけは、他の経営者には絶対負けないと思っています。

――今の学生の皆さんも、折角関西学院に入ったのだから、それぞれの軸をしっかりと身につけていけば本当にいいと思いますが。

学校の規模が大きくなっていく中で、そのようなところが希薄になる懸念があると思います。

先日、同窓会長の村上さんとお会いしたのですが、その時も二人で、大学はこの軸をずらしてはダメだということで意見が一致しました。先生方にも職員の方にも、そこが確実にできなかったら、関西学院たる所以がないぐらいに思っていただかないと、と思います。

関西学院で先生方もそこをしっかりと教えてほしいと思います。知識やテクニカルなことを教える優秀な先生は他の学校にもいっぱいいるわけで、関西学院に入ったからには知識に加えて、“Mastery for Service”の心を育んで社会に出す、ということになれば、先生方にもそれが“Mastery for Service”の実践にもなるのではないでしょうか。

自分たちが地の塩、世の光になる

2015年、昭和石油との合併30年を記念して、経営理念を作り直そうということにしたのです。その時、今まで大切にしてきたものは何か、これから大切にしなければならないのは何かを、全グループ社員に聞きました。そこから作り上げたのが「私たちのエネルギーで未来を元気にします」というグループ経営理念なのですが、この”私たちのエネルギー“には二つの意味があります。

一つは昭和シェル石油が持っている、石油、太陽光などのエネルギーで、もう一つはこの会社と社員、組織が持つエネルギーです。このエネルギーで社会を元気にするという意味で、まさに私たちの“Mastery for Service”なのです。自分たちが地の塩、世の光になろう、という心ですね。東日本大震災の時もまさに求められたのは石油というエネルギーでしたが、併せて私たち全社員のエネルギーも被災地の皆さまにお届けできたのではないかと思います。

社会はこれから益々不確実性が増していきます。これまでの延長線上では考えられないことが世界でも起こっていますし、これからもますます増えてくると思います。このような世の中に学生を送り出していくわけですが、そこで“Mastery for Service”という軸をしっかり持っていれば、どんな世の中であっても対応することができると思います。ここをちゃんとして送り出していただければあとは自分でどんどんと成長をしてくれるし、関学はいい人材を送り出してくれるという評判になるのではないでしょうか。

「ダイバーシティ＆インクルージョン」という言葉が最近よく言われます。多様性を受容れ、様々な意見やアイディアを聴き入れることで、組織の競争優位性を高める「成長戦略」のことです。難しいのはインクルージョンの方ですね。多様化した組織からイノベーティブな意見がどう出てくるか、それをどう実践していくか、こちらの方が難しい。関西学院大学も、様々な学部があって外国人も含めいろんな価値観の方がいると思いますが、その中で何が生み出されていくのか、このアウトプットを意識しない国際化は面白くありません。大学生活の中で、どんな化学反応が起こって、どんな新しいもの、どんないいものが出てくるのか、楽しみにしています。